



中里介山著

大菩薩峠

大菩薩峠刊行會

昭和二十七年十一月五日 印刷
昭和二十七年十一月十日 發行

(乱丁、落丁はお取替いたします)

大菩薩峠 (第十四卷)

定価三百八十円

送料 五〇円

著作権者 中里 幸作

発行者 中里 幸作

東京都品川区南品川五ノ十三

印刷者 森 高 繁 雄

東京都千代田区神田錦町三丁目十三番地

大菩薩峠刊行会

発行所 株式会社 彩光社

振替 東京 一九三九七六番

富士高速印刷株式会社印行

大
菩
薩
峠

第
十
四
卷

目次

白雲の巻……………五

膽吹の巻……………三五

題

字

裝

畫

口

繪

道

重

信

教

橫

山

大

觀

北

蓮

藏

編纂責任

梁 寺
取 島
三 枉
義 史

三十四 白雲の巻

一

秋風ぞ吹く白河しらかはの關せきの一夜、駒井甚三郎に宛てゝ手紙を書いた田山白雲は、その翌日、更に北へ向つての旅に出で立ちました。

僅かに勿來の關で、遠くも來つるものかな、と感傷を逞うした白雲が、もうこの邊へ來ると、卒業して、漂浪性へうろうせいがすつかり根を張つたものですから、低徊ていかい顧望こぼうなんぞといふ、娑婆しゃばツ氣も消えてしまつて、寧ろ勇ましく、北地へ向けての、ひとり旅が成立ちました。

得てして、人間の旅路といふものはこんなものでして、ある程度の處で、ちよつと堪こらへられぬやうにホームシックにかまがるが、これが過ぎると、またおのづからいゝ氣といふものが湧いて出て、可なりの臆病者おくびやうものでさへが、唐天竺からてんぢくの果までもといふ氣分になりたがるものです。

白河城下しらかはじやうかを立ち出でたその夜は、須賀川すかががはへ泊りました。

白河から八里足らずの道。

この地に「投弓とうきう」といふ風流人があるからたづねて見よと、人に教へられたまゝに、たづ

ねると、快く入れて、もてなして泊めてくれました。

その翌日、例の牡丹ぼたんの大木だの、亞歐堂あおうどうのあとだの、芭蕉翁さうせきの舊蹟きうせきだといったやうなものを、親切に紹介されて、それから投弓とうきゆうの爲に白い袋戸へ、山櫻と雉を描いて、さて出立といふ時、主人が若干の草鞋錢と「奥の細道」の版本を一冊くれました。

若干の草鞋錢は、先方の好意でしたが、奥の細道は先方の好意といふよりも、こつちの強要といつた方がよかつたかも知れません。

「奥の細道」これが欲しい、この旅にこれは越裳氏あつさろしが指南車しなんしゃに於けると同じだ、——ぜひこれを拙者にお貸し下さい」

かういつて、白雲が強奪がうだつにかゝつたのを、根が風流人の投弓が、いやといへよう筈もなく、彼の拉ちし去るに任せたものです。

白雲は、それから「奥の細道」の一卷くわんを、道ながら、手より措かずに、ある時は、高らかに讀み、或る時は道しるべの案内記として、足を進めて行きました。

白雲が「奥の細道」に愛著あいじゃくを感じてゐることは一日の故ゆゑではありません。凡そ、旅を好むものにして「奥の細道」を愛讀あいどくせざるものがあらうとは思はれません。

白雲も亦、芭蕉はせうの人格を偉なりとすることを知つてゐる。その發句の神韻しんたんは、到底、後人こうじんに第二第三があり得てゐないことを信じてゐる。その發句のみではない、その文章がまた古今獨歩こんどくほである、黄金は何處へ傷きずをつけても、やつぱり黄金である。人格となり旅行となり發句となり、文章となるとはいへ、いづこを叩いても神韻の宿ることは、あたり前過ぎるほどあたり前の事だが、その文章のうちでも、この奥の細道は古今第一等の紀行文である。單に文章家として見た處で、馬琴よりも、近松よりも、西鶴よりも上で、徳川朝では、これに匹敵ひつてきされる文章は無い、少くとも鎌倉かまくら以來の文章である——白雲は、斯く芭蕉の紀行文を愛して、その貧弱ひんじやくな文庫にも藏し、その多忙なる行李かろりの中にも隠さなうといふことは無かつたのですが、今度は忘れて來た。さうしてその忘れた時に最も痛切つうせつなる必要を感じて來た。今その一冊を持ち合せあはせない事が、秋風の吹きそめた時、袷あはせを一枚剥がれたやうに、うすら寒い。

處が、それが、目の前に、投弓の家になつてゐたものですから、若干の草鞋錢なんぞは辭退しても、これをつつさらつて行かうといふ賊心に驅られたのも、また無理のない處がありませう。それがすんなりと、草鞋錢も、奥の細道も二つながら、かすめ得たもので

すから、心中の欣び、たとふる物なく、明治廿年代の子供が「小國民」を買つてもらつた時のやうに、嬉しがつて、聲高に讀み且吟じて行くといふ有様です。

白河の關にかゝりて旅心定まりぬ——成程、旅心定まりぬがい——この一句が、今日のおれの旅心を喝破してゐる。

いかで都へと便りを求めしも斷りなり、中にもこの關は三關の一にして、風騷の人、心をとどむ、秋風を耳に残し、紅葉を梯にして、青葉の梢なほあはれ也、卯の花の白妙に芙蓉の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする、古人冠を正し衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとどめおかれしとぞ。

古人の名文は、今人の心を貫くが故に、名文なのだ、名文といふものは人のいひ得ざることをいふが故に名文なのではない、萬人いはんとしていひ得ざることを、すら〜といひ得るから名文なのだ。

かうして、郡山、二本松、あさかの山——黒塚の岩屋を、それぐに一見して、福島にいたのは、その翌々日の事でした。

福島の家老に杉妻榮翁といふ知人があつて、これをたづねて見ると、この人は藩の政治

に、なか／＼勢力ある一人ではあつたが、またよく一藝一能を愛することを知るの人でしたから、白雲の爲に、その家がよい足がかりとなつたのみならず、かなりの仕事を與へられたのみならず、狩野永徳を見んが爲に松島に行くといふ白雲の意氣の盛んなるに感心し、

「成程——觀瀾亭の襖繪の事は、わしも聞いてゐる、それが山樂、永徳であるか、そこまではわしは知らん、併し乍ら、たしかに桃山の昔を忍ぶ豪華のもので、他に比すべきものはない、苟もその道に精進しようとするものは、一枚の繪の爲に、千里の道を遠しとせざるほどの意氣が無ければならん、それに就て思ひ起すことは永徳も元より結構に相違ないが——伊達家には、まだ一つ天下にかけ替のない筆蹟がある筈ぢや、それを御承知か」

「伊達家の事でござるから、それは天下にかけ替のない實が一つや二つではござるまいが——刀劍であらう、茶器であらう、これ等は拙者に於てあまり渴望もいたさぬし、また渴望致したからとて、拙者のやうな乞食畫かきに、わざ／＼寶藏を開いて見せる物好きな三太夫もござるまいとあきらめてゐます」

「それもさうだ、觀瀾亭の襖繪は、相當の紹介があれば、誰にも見せてくれるだらうが

——もう一つのは——これは到底及びもつかない事だらう、その點はあきらめるのが賢明ではあるが、學問の爲に、伊達家には、しか／＼のものがあるといふ事を覺えて置くのは無益でもござるまい」

「左様——踏蹬さうとうとして、他の寶を數へるのは智慧のない骨頂ですが、一體、あなたがこの際ぜひ覺えて置けとおつしやる伊達家の至寶とは何物ですか」

「それはなあ、勿論、伊達家の事だから、天下無二てんかむにの寶が數知れず寶藏の中に唸うなつてゐるには相違ないが——貴殿御執心の永徳よりも、それこそ眞まことに天下一品として、王羲之わうぎしの孝經きやうきやうがござる筈ぢや」

「王羲之の孝經——」

これを聞いて、白雲が一時眼を丸くして榮翁えいおうの面を見つめました、押返して、

「それは、いさゝか割引がかんじんぢや、大諸侯の物とて、一から十まで盲信するわけには行かん、一體、羲之の眞蹟はすべて唐の太宗が棺の中まで持ちこんで行つてしまつた筈で、支那にも、もはや斷翰だんかん零墨れいぼくもござらぬさうな」

「處が、伊達家の羲之には、れつきとした由緒因縁がある、しかもそれには唐の太宗の御

筆の序文までがついてゐるさうぢや」

「はゝあ——眉唾物ではござるまいなあ、まさか、奥州仙臺陸奥守のことでござるから、嘘にしても何かよるところがあるでござらうがな」

「あるく、大いにある、そのよるところを話してお聞かせ申さう」

こゝまで主客の間に話が進んだ時、來客で話の腰を折られてそれぎりになりました。

主人としては、なほ委しく、伊達家所藏の王羲之の孝經——しかも唐太宗親筆入りといふ絶代ものゝ出所來歴を話して聞かせたかつたらしいが、話がそこで折れた上に、その後は忙がしく、白雲も亦、いかに伊達家の事なりとも羲之の眞筆は少々割引物として、問ひをほごすことをして見ませんでした。

そこで、伊達家の王羲之は立ち消えになつたまゝで、白雲が、この邸を暇乞ひをする最後まで復活しなかつたのです。

けれども、この家の主人として、白雲が打立つ時に、仙臺へ向つての有力なる紹介者となつて、白雲の落つきを安くしてくれるの親切は残りました。その紹介者のうちに、

「仙臺へ著いたら、兎も角も、玉蕉女史をたづねてごらんさい」

といふのがありました。

玉蕉女史——とは何者。

それは才色兼備の婦人で、殊に漢詩をよくし、書をよくし、畫を見ることを知り、客を愛し、旅を好む、殊に漢詩を作ることには於て最も優れてゐる。

はゝあ、これは珍らしい、婦人で才氣ある婦人は必ずしも珍らしいとはしない、三十一文字を妙なる調もて編み出し、水莖のあとうるはしく艸紙物語を綴る婦人も珍らしいとはいないが、婦人にして漢詩をよくするといふ婦人は極めて珍らしい。

それにしても、たゞ單なる奥様藝で、覺束なくも平仄を合せて見るだけの藝當だらうとタカをくゝつて見ると、なか／＼どうして、頼山陽を悩ませた細香女史や、星巖夫人、紅蘭女史あたりに比べて優るとも劣る處はない、その上に稀なる美人で客を愛し風流の旅を好む、以前は江戸に出て、塾を開いて帷を下して子弟を教へてゐたが、今は仙臺に歸つてゐる筈、ともかくも、あれをたづねて見てごらん——全く才貌兼備、才の方は別としても、思ひがけないほど美しい婦人だから、その用心をして——。

はゝあ、外ならぬこの拙者に向つて、左様、然るべき才貌兼備の婦人をたづねよとは少々

キマリが悪いと、白雲はがらにもない羞恥心を少しく起しながら、兎に角、名前だけでも覚えて置くことだと、更に念を押すと、榮翁が答へて姓は高橋——名は玉蕉——家は仙臺の大町といふのへ行つて、それと尋ねれば當らずと雖も遠からず。

かくて、福島に逗留二日、

しのぶ文字摺、しのぶの里

月の輪のわたし

瀬の上

佐藤莊司が舊跡

飯坂の湯

桑折の驛

伊達の大木戸

鐙摺、白石の城

竹島の郡に入ると、實方中將の遺跡、道祖神の祠をたづねなければ奥州路の手形が不渡りになる。